

**漫画作品にみる大学図書館員のイメージ ～「図書館の自由」を中心に～**  
 沖縄国際大学総合文化学部講師 山口真也

**はじめに(研究の目的)**

「看護婦は白衣の天使」、「先生は聖職者」など定着したイメージを持つ職業がある。では「私の仕事は図書館員です」という言葉を聞いて、人はどのような人物をイメージするのだろうか。「図書館員、司書」という職業はどのように評価されているか、「ステレオタイプ」というものはあるのか、そのステレオタイプは好意的なものか、事実と反していないか、ということは、図書館員であれば、誰しも興味がある事柄だろう。こうした観点から、図書館員の人物像、職業観、職務内容に注目して、そのステレオタイプ(イメージ)を調査し、図書館員としての理想の姿とのギャップを観察することで、図書館界の課題を考察する研究分野がある。今回の講演では、図書館員のイメージを探る一つの手法としてメディア(漫画作品)にみる大学図書館員の人物像と言動に注目し、特に「図書館の自由」との関係から「図書館員」という職業のイメージとその問題点について論じてみたい。

**1. 研究の方法 ～漫画を使ったイメージ研究**

図書館員のイメージを知るための方法としては、第一にアンケート調査という方法がある。しかし、この方法では調査を開始した時点からの結果しか得ることができない。そこで、用いられている方法が、「メディア」の中で表現される図書館員の姿から職業イメージを探る方法である。例えば、小説やテレビドラマ、映画などの表現作品の中で、図書館員がどのように描かれてきたか、ということ进行调查し、メディアからどのような図書館員像が発信され、読者や視聴者にどのようなイメージを与えてきたか、ということ考察する。こうした研究は、これまで映画やテレビドラマといった映像メディアを中心になされ、若年層に大きな影響力を持つ「漫画」というメディアはあまり取り上げられていない。過去への遡及的な調査が容易であり、大衆への影響力を持ち、しかも作者のイメージがストレートに反映されやすい漫画というメディアは本研究において好材料であると言えるだろう。

**2. 大学図書館員の人物像 ～性格・職業観**

現在までに収集することができた図書館または図書館員が登場する漫画作品は、1960年代 11 作品、1970年代 246 作品、1980年代 555 作品、1990年代 844 作品、2000年代 131 作品、合計 1787 作品である。1ヶ月に 500 冊の単行本が出版されると言われる漫画市場を網羅的に調査することができたわけではないが、これまでに収集した図書館員のサンプル数は 449 人、うち大学図書館員は 46 人にのぼっている(全体の 7 割が女性=表 1 参照)。漫画作品の中で描かれる図書館員像について、大まかな傾向を知ることは可能だろう。

では、「図書館員」が漫画作品に描かれる際、彼らは自分の仕事に対してどういう職業観を持ち、また、どのような性格の人物として描かれるのだろうか? 漫画作品に登場する 449 人のうち、人物設定のある人物に注目し、その性格ごとに大きな傾向ごとにグループ化したところ表 2 のような結果となった。

表 1 館種別図書館員の性別

	男	女	不明	合計	女性比
公共	63	126	4	193	66.7
学校	24	123	11	158	83.7
大学	11	32	3	46	74.4
国立	11	10	6	27	47.6
専門	15	4	0	19	21.1
不明	3	2	1	6	40.0
合計	127	297	25	449	70.0

\*女性比率は性別不明者を除く数値

表 2 図書館員の人物像(性格・職業観=網掛けの作品は大学図書館員)

イメージ(性格・職業観)	作品	人物設定
1) 図書館員は「平凡で安 穏な職業」である 面白みのない職業/健康 に不安を抱えていてもで きる仕事/体力的に楽な 仕事/暇な仕事/不自由 な仕事/左遷先	『緑の頃私たちは』	死を宣告された図書館員。余生を公共図書館員として過ごす。
	『ひらひら』	退屈で不自由な仕事が終わると、夜毎、着飾って街に出かけてナンパ。「素直になりたい、風になりたい」と思っている。公共図書館員
	『緑の家』	平凡な毎日にうんざり。部屋でこっそり大麻を栽培してスリルを求める。公共図書館員
	『山科けいすけの中流図鑑』	会社の資料室に「左遷」される男性、生きがいを失ったような顔
	『聖・三角形』	昼間は地味な服装でつまらなさそうに仕事、夜になると派手に着飾り遊び歩く。学歴コンプレックス
	『セーラー服心中』ほか	カウンターであくび、いつも居眠りをしている。「おじさん、またねてる……」
2) 図書館員は「仮の姿」である 昼間は地味な図書館員、し	『天才柳沢教授の生活』	本名も経歴も一切謎の人気作家「新井田子」。
	『マジカル・ブルー』	風の魔女、ダイアナ。難事件を解決。
	『ココロ図書館』	プロフィールを秘密にしている人気作家。

かしその正体は？／平凡な職業を隠れ蓑にしている／いつ辞めてもいいと思っ ている ／図書館員の仕事自体にはあまり興味はない	『ハーフ&ハーフ』	覚せい剤の売人、図書館の本の間に麻薬をはさみこんで利用者に売り渡す。公共図書館員
	『2HEARTS』	難事件に立ち向かう操律師。「操律師なんて聞こえはいいけどそれはウラの話、表ではこーやって人並みに働かなくちゃいけないなんてね」とぼやく。
	『恋とマシガン』	覆面作家(ノンフィクションライター)。学校の不正を暴く。学校図書館員
	『ハトの旋律』	学内の不正を暴くため、図書館員(助手)として潜入。エスパー少女。学校図書館員
3) 図書館員は「謎の人物(ミステリアス)」である 何を考えているか分からない／あやしい／影がある	『ポケットに聖書を』	世界中の子供を本の中に閉じこめながら旅する移動図書館員。魔物
	『転生人魚』	謎の凶鑑を貸し出し、利用者を殺害
	『悪魔の花嫁』	嫉妬に狂い愛人の男性館長を殺害。遺体を暖炉で焼く
	『幻境図書館』	靈感が強い図書館員が多数登場
	『名探偵コナン』	殺人犯。図書館内に死体を隠す
	『十年少年』	女装が趣味の男性職員、男子生徒と噂
	『夜の夜中の向こう側』	異界への案内役
4) 図書館員は「無愛想」「一人が好き」「偏屈」である 「根暗」「陰気」／「我が道を行く」／他者との接触をできるだけ避けて生活できる仕事として図書館員を選ぶ／世捨て人のイメージ／変わり者	『とんでもナイト大事件!』	「ネックレス泥棒では？」と噂される怪しい人物
	『キャンドルにお願い』	長い髪、吸い込まれるような瞳、足音が聞こえない。「フンイキありすぎ」
	『老年期の終わり』	近未来の移民惑星住民。人類が地球に戻る日、一人惑星に居残ること(=死)を決意する老人。
	『図書館であいたい』	洋服のセンスが悪く、「図書館の黒イモリ」と揶揄される。しかし、本人はまったく気にしていない。
	『恋とマシガン』	表面的には愛想がよいが、「ガキは嫌い。生意気だし、うるさい」というセリフあり。
	『雑居時代』	「換気といっってはやたら窓を開けたがる司書のおばさん」。図書室は「ツンドラ地方」と呼ばれる。
5) 女性図書館員は「地味(暗い)で、「恋に臆病(奥手)」 「男性に縁のない職業」である ライフスタイルとして「結婚しない」ことを選択／失恋のショックから恋なんてしないと決意して図書館員になる／ただし、全く正反対のイメージの人物が描かれる場合も	『ハーフ&ハーフ』	ある事件をきっかけに心を閉ざした男性職員。仕事はできるが、無愛想。
	『恋人もどき』	男性利用者に誘われるがとりつくシマもない。蔵書検索を頼まれるが「ありません」と一言。利用者からは「愛想がない」と言われる。
	『エラリィによるしく』	「司書のハイミス」というセリフあり。
	『教師によるしく』	「ホモ系ジュニア小説」ばかりを収集している。
	『本当のことを言おうか』	純粋な女性。好きな男性と恋人の会話を聞いて書架の影でうっとりするだけ。
	『妖しのセレス』	男子生徒にモテモテの主人公に嫉妬し、ねちねちと嫌みを言う。
	『実験人形ダミーオスカー』	やせた女性。さらしを巻き体型を隠す。厚化粧 地味な女性、男との交際経験なし
	『不思議の国のミスアリス』	恋の傷が癒えてない女性。「もう二度と恋なんてしない」と思っている。
	『風なりたい夜』	過去の恋愛が忘れられない
〈よいイメージ〉 6) すてきな女性 主人公(登場人物)のあこがれ／恋のライバル／大人の女性	『週末 Heaven』	恋人に裏切られ、家出、失意を抱えて区立図書館でバイトをすることに。
	『わたしちの結婚』	芸能人の妹にコンプレックスを持つ女性。男性に誘われ、徐々に心を開く。
	『あじさい色の雨の中』	主人公の恋敵。「図書館のお姉さん」として生徒から慕われる。結婚後、退職。
	『図書室の彼』	主人公の恋敵。男子生徒と交際中。
『DESIRE』	主人公のあこがれ。大人の女性	
『恋する毛玉』	司書水島麻子。主人公の恋敵、キレイな人、いい人という評価あり。	

<大学図書館員のイメージ2>

- 1) 図書館員は平凡でつまらない、楽な仕事(いつ辞めてもいい) 2) 図書館員は謎の人物・怪しい・正体不明  
3) 図書館員は無愛想・一人が好き・変わり者・偏屈 4) 図書館員は恋に奥手・臆病、何事にも消極的

### 3. 図書館員のサービス

世の中の人々は、「図書館員」と聞くと、どのような仕事の内容をイメージするのか？ 次に、漫画作品において図書館員が果たす役割を調査し、大学図書館員の職業イメージを考えてみよう。下表は漫画作品に登場する 449 人の図書館員の主な行動・サービス(合計 583 回)について集計した結果である。

表3 図書館員のサービス・行動 (館種別/合計順)

サービス・行動	館種	学校					大学	国立	専門	不明	合計
		公共	高校	中学	小学	不明					
利用者を注意	46	51	7	0	1	59	9	1	1	1	117
貸出	54	20	4	1	1	26	11	0	2	1	94
カウンターの番(居眠りを含む)	35	14	3	0	0	17	11	2	1	1	67
排架・書架整理	31	13	1	0	0	14	3	0	1	0	49
利用記録の調査(漏洩・個人的利用を含む)	14	14	1	1	0	16	9	1	0	0	40
蔵書検索・所蔵調査・排架場所の案内	21	6	0	0	0	6	5	3	1	2	38
情報サービス	8	0	0	0	0	0	9	5	9	0	31
閉館準備	16	7	4	0	0	11	3	0	0	0	30
図書委員の指導	0	19	4	0	0	23	0	0	0	0	23
資料の受け渡し	5	2	0	0	0	2	2	4	3	0	16
資料収集・除籍	6	4	2	0	0	6	2	0	1	0	15
合計10以下の項目は省略(予約・リクエスト、資料整理、同僚を注意、図書委員を注意、相互貸借、複写など)											
合計	268	169	30	2	2	203	67	20	19	6	583

#### 3.1 「利用者を注意する」ことが主な仕事？

漫画作品の中で最も多く描かれている図書館員のサービス・行動は「利用者を注意する」という行為である。数ある図書館サービスの内、全体比で約3割、学校図書館については4割にのぼっている。もちろん、利用者が館内で引き起こす何らかの問題行動に対して、図書館員が「注意する」という行為は、「利用指導」「利用者教育」という面から見て、重要なサービスの一つである。ただし、ここで注意しなければならないことは「利用者を注意する」という行為が、

登場人物が集まって図書館で勉強 → いつの間にか口論・喧嘩が始まる(声が大きくなる) → 職員が大声で「静かにしなさい!」「ここをどこだと思っているんですか!」 → 利用者を図書館から追い出す

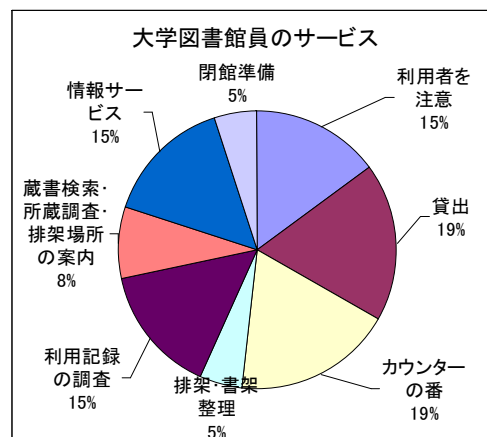
というようなパターンで行われ、しかもそのパターンが漫画作品の中である程度定着しているということである。こうした場面が漫画作品の中で描かれる上での問題点としては以下の3点が挙げられる。

- 1) ほぼ全ての行為が「感情的に怒る」という行為に結びついていること(=ヒステリック、恐い印象を与える)
- 2) 「利用者を注意する」という行為の多くが、「顔を真っ赤にして」「利用者よりも大きな声で」「つばを飛ばしながら」「鼻息を荒くして」という行動を伴うこと(滑稽な印象を与える)
- 3) 利用者を図書館から追い出すという行為によって終了すること(「利用者教育」「利用指導」として描かれているわけではない)

なお、「利用者を注意」する行為は特に学校図書館が登場する漫画作品で多く描かれるが、大学図書館では「利用者を注意する」行為の割合は他の図書館と比較して、若干小さくなっている。それぞれの注意の仕方についても、嫌味な印象は受けるものの、学校図書館員ほど威圧的な態度では描かれていない(図参照)。漫画作品の中の大学図書館員は(他の館種と比較すると)それほど「滑稽な役割」を演じることはない。

#### <大学図書館員のイメージ3>

- 1) 図書館員のもっとも重要な仕事は館内の静寂を守ること(=利用者を注意すること)である。
- 2) 図書館員は恐い、うるさい人物である。
- 3) 図書館員は滑稽な人物である。
- 4) ただし、大学図書館員は(他の図書館員と比較すると)それほどヒステリックな人物、滑稽な人物ではない



### 3.2 大学図書館員には「情報の専門家」というイメージもある？

表から分かるように、漫画作品の中では、情報サービス(レファレンス・情報検索サービス)はそれほど多く描かれているわけではない。特に学校図書館については「0」となっている。例えば『踏まれた天使のように』では(右図)、図書館の情報サービスを利用すべきシーンであっても、図書館員が登場することはない。学校図書館員は情報サービスの専門家としては全く期待されておらず、「本屋」(店員)よりも頼りにされない存在として認識されていることがわかるのである。

一方、大学図書館についてみると、「情報サービス」は全く描かれていないわけではない。全体に占める比率をみても「利用者を注意」と同じく15%を占めている。大学図書館員は単に漫画作品の中で滑稽な役回りを果たすだけでなく、「情報の専門家」という利用者から頼られる存在としても描かれている。「貸出」や「利用者を怒鳴りつける」といった偏ったイメージでとらえられがちな漫画作品内の図書館員の中でも、大学図書館員は他の館種と比較してよいイメージを持つ人物として描かれていると言えるだろう。

#### <大学図書館員のイメージ4>

大学図書館員は「情報サービスの専門家」(頼りになる人)である

### 3.3 図書館員は「利用者の秘密を漏洩する」人物である？

図書館サービスを行う上でもっとも重要な理念となる「図書館の自由」という考えについては漫画作品の中でどのように描かれているのだろうか？ 結論を先に述べれば、「資料収集・提供の自由」や「利用者を差別しない」といった理念は漫画作品の中ではほとんど触れられていないのが現実である。漫画作家の多くは図書館学を専門的に学んだ機会がないと考えられるため、「図書館の自由」という理念が描かれにくいこともそれほど不思議なことではない。しかし、漫画作品の中では「図書館の自由」が触れられないどころか、むしろ正反対の行動をとる図書館員が登場することには注意が必要である。表3から分かるように、特に「利用記録の調査(不注意による漏洩・個人的利用を含む)」行為が当然のサービスとして数多く描かれているのである。

「図書館の自由に関する宣言」(日本図書館協会, 1979)<sup>1</sup>、「図書館員の倫理綱領」(日本図書館協会, 1980)<sup>2</sup>に明記されているように、「すべての図書館員」は、「館種、館内の地位、職種及び司書資格の有無にかかわらず」、図書館利用者に関する以下の情報を、利用者に無断で第三者に開示したり、本人の知らないところで本来の目的以外に使用されてはならないとされる。なぜなら、個人の利用記録が簡単に第三者に開示されたり、無断使用されてしまうような図書館であるとする、利用者は「図書館を利用しない」か、「読んでいることを秘密にしたいような本は図書館では利用しない」かのいずれかの行動をとることになるからである。こうした行動を利用者に選択させる図書館では、結果として利用者の「読書の自由」(=知る自由)を大きく侵害することになる。よって、図書館員は利用者の読書行為に対して、利用者からの求めがない場合は、極力「干渉しない」ことを前提としてサービスを行わなければならない。しかしながら、漫画作品の中では、図書館員が利用者の利用記録を無断で第三者に開示する場面が数多く描かれている。利用記録を漏洩する図書館員が登場する作品について、大学図書館での漏洩事例を中心にいくつか紹介してみよう。

#### ■図書館が保護しなければならない「利用者の秘密」

- 1) 貸出記録(誰がいつ、どのような本を借りたか、いつ返却されるか?、どのような本を予約しているか?)
- 2) 読書傾向(どのようなジャンルの本を好むか?)
- 3) 館内利用記録(閲覧記録、レファレンス記録・複写記録・AV資料利用記録など)
- 4) 来館記録等の情報(来館日・来館頻度)
- 5) 利用者記録(氏名・住所・職業・電話番号・家族構成等)

<sup>1</sup> 「図書館の自由に関する宣言」第3 図書館は利用者の秘密を守る

1) 読者が何を読むかはその人のプライバシーに属することであり、図書館は、利用者の読書事実を外部に漏らさない。ただし、憲法第35条にもとづく令状を確認した場合は例外とする。  
2) 図書館は、読書記録以外の図書館の利用事実に関しても、利用者のプライバシーを侵さない。  
3) 利用者の読書事実、利用事実は、図書館が業務上知り得た秘密であって、図書館活動に従事するすべての人びとは、この秘密を守らなければならない。

<sup>2</sup> 「図書館員の倫理綱領」第3 図書館員は利用者の秘密を漏らさない。

図書館員は、国民の読書の自由を保障するために、資料や施設の提供を通じて知りえた利用者の個人名や資料名等をさまざまな圧力や干渉に屈して明かしたり、または不注意に漏らすなど、利用者のプライバシーを侵す行為をしてはならない。このことは、図書館活動に従事するすべての人びとに課せられた責務である。

(1) 貸出記録の漏洩 ～あの人にはどんな本を借りたの？／この本を今借りているのは誰？

貸出記録は個人の読書傾向をもっとも明確に示す情報であり、その管理がもっとも重視されている。漫画作品では1)ミステリーの謎解きや、2)登場人物の出会いのきっかけとして、図書館員が貸出記録の照会に答える場面が数多く描かれている。

作品名と館種	漏洩の状況
『夢の外は悪魔の森』(大学)	借りたい本が書架に見当たらなかったため、職員に尋ねる主人公。職員は「茂原教授に貸出中」と伝える。利用者は早速研究室へ。(右図上)
『金田一少年の事件簿』(学校)	ある殺人事件を調べている主人公。貸出カードのない本を見つけ、その本の借り主を職員に尋ねる。「その本でしたら、3週間前から3年生の桜樹るいさんが借りているはずですよ」と職員。(右図下)
『教師にやらせな!』(学校)	男性生徒に思いを寄せる女性教師。ライバルの女生徒がどのような人物なのかと職員(司書教諭)に尋ねると、「文芸部の子でよく図書室に来る」「マルセル・ブルーストの”失われた時を求めて”を全巻読破している」と職員。
『ドラねこ☆フリーング』(学校)	貸出業務を終えた学校図書館職員。カウンターに忘れられた図書カードを見つけ、同じクラスの女生徒に渡すように頼む。書名カードから借り主を推測し、「沖田さんにわたして」と頼んでいる。

(2) 貸出記録が残る図書館システム

貸出サービスの際に集められる様々な記録、例えば帯出者氏名、タイトル、返却期限などの貸出記録を管理する目的は、図書がいつまで誰に貸し出されているか、ということ把握することにある。つまり、図書館の貸出記録は、「図書を管理するためのものである、個人の読書傾向を管理する目的の下で集められるわけではない」のである。従って、返却後(つまり、図書を管理するという目的を果たした後の)貸出記録はコンピュータ上から消去されるべきであり(カード式の場合は利用者にカードを返す)、いつまでも貸出記録を保管し続ける必要性はない。「記録」というものは保管され続けている限り常に漏洩の危険にさらされることになる。利用者のプライバシーである貸出記録を最も効果的に守る方法とは、必要最低限の記録のみを保管し、不要になればすぐに消去するということである。貸出記録の返却時の消去は図書館システム設計の基本と言えるだろう。にもかかわらず、漫画作品の中では貸出記録がいつまでも残される設計の図書館が数多く登場する。

作品名と館種	漏洩の状況
『探偵日記』(公共)	主人公は図書館の本を破り取った人物を捜すために、図書館の貸出データを調べること。「コンピュータシステムを解説してほしい」と頼み、貸出データの画面を表示させる。職員は「秘密保持の原則があるため見せられない」と答えるが、主人公は一瞬映った画面をのぞき、氏名住所を咄嗟に覚える。
『BISHOP』(学校)	主人公は、失踪した友人の行方を探すため、図書委員に協力してもらい友人の貸出コードを使って過去4ヶ月間に何冊の本を借りたかを調べる。
『図書室の彼』(学校)	好きな男子生徒の図書カードを拾った女生徒は同じ本を借り続ける。後日、男子生徒はカウンターのコンピュータを使って、過去の貸出データから、女生徒が自分と同じ本を借りていることに気づく。隣にいる職員はその行動を注意しない。(右図上)
『ハーフ&ハーフ』(公共)	主人公の図書館員は過去の貸出記録を使って、同僚による覚醒剤密売のトリックを暴く。(右図下)

(3) 館内利用記録の漏洩 ～あの人はいつ図書館に来るの？／あの人は何をしていたの？

図書館が厳重に管理すべき記録は貸出記録だけではない。当然ながら、館内での様々な資料利用記録や来館記録もまた個人のプライバシーとして保護されなければならない。例えば、来館頻度、複写記録やレファレンス記録なども貸出記録と並ぶ個人情報である。

作品名と館種	漏洩の状況
『MONSTER』(大学)	ある利用者の図書館での行動を他の利用者に詳細に教える司書が登場。後の場面ではさらに利用していた書名をも伝えていたことが判明。(右図)
『本当のことを言おうか』(学校)	死んだ利用者の図書館内での行動をその弟に伝える女性アルバイト職員。「本を読むより本をながめる方が好き」ということも広く考えれば読書傾向の一つである。
『ゴルゴ13』(国立)	国立国会図書館の職員。調査に来た議員に尋ねられ、同じ資料を少し前に利用していた人物の風貌を詳細に答える。
『魔探偵ロキ』(公共)	友人を捜して図書館にやってきた主人公に、「入ってくる時は見たけど、出ていくのは見てない」と答える図書館員。

#### (4) 利用者記録や貸出記録の個人的使用・目的外使用

利用者の読書傾向や住所、氏名などの個人情報とは本来、貸出などの直接サービスを円滑に行うことを目的として集められた情報であり、利用者はそれらの情報を別の用途で活用されることを全く予期していない。利用者が予期していない用途で個人情報を活用することは個人情報保護の観点から見て人権侵害行為となる。図書館ではこうした問題を考慮し、貸出記録等は図書館サービスと無関係な他の目的では使用しないことを約束しなければならない。

作品名と館種	漏洩の状況
『ALEXANDRITE』(大学)	「中退した学生も含めた名簿とか見られないかな」と頼まれたアルバイト職員は「そういう記録は(中略)プライバシーに関わることだし」と一度は断るが、結局、職員に内緒で記録を利用者に渡す。
『図書館であいたい』(大学)	アルバイト職員が、同僚とその恋人の貸出カードから、その個人データを無断で閲覧し、名前・出身校を調べる。(右図上)
『聖・三角形』(大学)	不倫相手の大学教授と話を合わせるため、彼が借りた本を調べて読みあさる女性職員。個人的理由で利用者の読書傾向を調べることは許されない。(右図下)
『賢き愚人』(大学)	殺人を犯した図書館員。自白の際に、利用者の閲覧記録を警察に伝える。捜査協力のための情報提供を求められた場合でも、本人の承諾か、捜索令状の確認の上で個人情報を開示するかどうかの判断を行わなければならない。
『マジカルブルー』(大学)	大学教授とつきあっている女性司書。同僚の司書に二人のなれそめを相談。「半月ほど前に赤沢教授から声をかけられたの、君はオカルト関係に詳しいよね。私も目下その方面に興味を持っているって」
『女ともだち』(公共)	「図書館のカードって精神のカルテカードに似てると思わない？」と言いながら利用者の貸出カードをのぞき見る女性職員。図書館職員が退屈しのぎに利用者の貸出記録から頭の中を勝手にのぞき見していると誤解される恐れあり。

漫画の中にこうした図書館員の行動が数多く描かれるということは、一般には「図書館の自由」という考えがほとんど理解されていないということの意味している。逆に言えば、「図書館員＝利用情報を教えてくれる人」とイメージが定着しているということでもあるだろう。漫画の中で、「図書館員は利用記録を守る人」ではなく、むしろ「教えてくれる人、ばらす人、漏洩する人」と考えられている。

#### <大学図書館員のイメージ 5>

- 1) 大学図書館員は利用者の秘密(プライバシー)を教えてくれる人物である
- 2) 大学図書館員は利用者の秘密(プライバシー)を悪用する人物である

#### おわりに ～なぜ「図書館の自由」は理解されないのか？

以上のように、漫画作品の中では「図書館の自由」はほとんど理解されていないという現実がみえてくる。こうしたイメージは図書館員の専門性を全面的に否定するものである。ではなぜこうした図書館員が多く描かれるのだろうか？ 筆者はその理由として次の2点があるのではないかと考える。

- 1) 現実の「図書館の自由」「利用者の秘密を守る」という理念が正しく理解されずにサービスが行われているのでは？(現実にも漫画のようなプライバシー侵害が行われている？)
- 2) 「図書館の自由」「利用者の秘密を守る」という理念は公共図書館を中心に考えられているため、全ての図書館に共通の理念としては適用しにくい。保護すべき「プライバシー」に対する解釈が各大学図書館によって異なるのでは？

大学図書館における「読書の自由」そして「学問の自由」を実現するためには、図書館員による日々のサービスの自己点検とプライバシー領域の整理が必要となるのではないだろうか。最後に、本日紹介した漫画作品を手がかりに以下のケースについてその問題点を整理してみよう。

漏洩の種類	大学図書館でのプライバシー侵害例？
(1) 貸出記録の漏洩	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 貸出中の貸出データを(責任者以外の)全ての職員が参照できる。</li> <li>2) 研究室貸出の本について学生に「〇〇先生が持っていますよ」と答えてしまう。</li> <li>3) 研究室貸出の本の所在が OPAC の所蔵情報として表示される</li> <li>4) 督促本の掲示(書名入りで掲示する)</li> <li>5) 購入希望・予約リクエスト図書(書名入りで入荷を知らせる)</li> </ol>
(2) 貸出記録が残るシステム	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 過去の貸出記録がさかのぼって表示できるシステム</li> <li>2) 貸出記録が画面上では消えても、ログとして残されている</li> </ol>
(3) 館内利用記録の漏洩	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 学外者入館票の管理がずさん(書名や氏名が書かれた用紙を入口に放置していないか?)</li> <li>2) 複写用紙の管理がずさん(書名や氏名が書かれた用紙をコピー機脇に放置していないか?)</li> </ol>

	<ul style="list-style-type: none"><li>3) レファレンス記録、複写記録等を廃棄せずにいつまでも保管している(廃棄規定がない)</li><li>4) 各記録等をゴミ箱に捨てたり、メモ用紙として再利用するなど、破棄方法がずさん</li><li>5) インターネットの履歴、一時ファイルは利用者ごとに削除しているか?</li><li>6) 館内放送等による呼び出しは可能か?(番号札制にすべきでは?)</li></ul>
(4)利用者記録や貸出記録の目的外使用	<ul style="list-style-type: none"><li>1) 利用者が借りた本について職員同士で噂話(アルバイト職員への指導が徹底していない)</li><li>2) 気になる利用者について個人的に住所や貸出記録などの個人情報を引き出す</li><li>3) 警察機関への捜査協力時の対応マニュアルは準備されていない</li><li>4) 学生課等の大学内部からの照会に安易に答える(問題行動を起こす学生について「どんな本を借りていますか?」と聞かれ、リスト等を提供する)</li><li>5) 学生課等への情報提供(「あの学生はちょっと様子が変わりました」「図書館で騒いでいました」「自殺マニュアル本を読んでいました」)</li></ul>

「図書館の自由」「利用者の秘密を守る」という図書館員の専門性を広く定着させるためには、まずは図書館員一人一人の正しい実践が重要である。しかし大学図書館サービスと「図書館の自由」との関係性を正しく理解することはなかなか難しい。今回の講演が大学図書館における「図書館の自由」「プライバシー保護」のあり方を考えるきっかけになれば幸いである。ご静聴ありがとうございました。

—————アンケートへのご協力をお願いします(きりとり)—————

## ■大学図書館におけるプライバシー保護に関するアンケート■

(平成 14 年 11 月 6 日実 施沖縄国際大学総合文化学部講師 山口真也作成)

大学図書館における利用者のプライバシー保護のあり方についてみなさまのご意見をお聞かせください。本アンケートは今回の講演内容に関する研究以外には一切使用しません。

**Q1** 以下の各事例について、大学図書館員による利用情報の提供は可能でしょうか? 教育機関としての大学の機能と、「知る自由」「学問の自由」を保障する研究機関としての大学図書館の機能などをふまえて考えてください。(該当する項目に○をつけてください)

<事例1> 学生課や医務室など、大学内の部署から図書館に対して、「日頃から粗暴な発言、行動が目立つ男子学生」について、読書傾向や貸出記録、来館頻度、館内での様子などの情報提供を求められた場合

- 1) 利用情報を提供してよい
- 2) 利用情報はいっさい提供してはいけない
- 3) 提供してよい情報と提供してはいけない情報がある(空欄に具体的に記入してください)

<例>館内での様子は伝えてよいが、読書傾向や貸出記録は伝えてはいけないと思う。

<事例2> 図書館においてアルバイト学生を採用する際に、その学生の人物を知りたい場合、

- 1) 利用情報を活用してよい
- 2) 利用情報はいっさい提供してはいけない
- 3) 提供してよい情報と提供してはいけない情報がある(空欄に具体的に記入してください)

<例>読書傾向や貸出記録は活用してはいけないが、これまでの利用歴(利用マナー、延滞の頻度)などは活用しても特に問題はない。

**Q2** 日々の図書館業務の中で、利用者のプライバシー保護について判断に迷ったことはありますか? もしあれば教えてください。(空欄にご記入ください)